

イタリア語独習の手引き

古 浦 敏 生

I 文法書について

まず、和書として最もくわしいものは、ヴェッカーリ「伊語会話文典」1957であろう。但し、これは今や入手困難である。入手可能なもののうち良さそうなのは、野上素一「イタリア語四週間」大学書林、坂本鉄男「イタリア語の入門」白水社、菅田茂昭「現代イタリア語入門」大学書林、あたりであろう。特に菅田氏のものには、言語学的立場からの説明が加えられていて面白い。

次に、専門的な研究を志す人は、現在最もくわしいRohlf's, G.: *Historische Grammatik der italienischen Sprache*, Band I~III, 1949~1954, Bern (伊訳あり) に目を通さねばなるまい。これは歴史的にも方言的にも幅広い記述文法である。また、Battaglia, S. & Pernicone, V.: *La Grammatica Italiana*, 1957, Torino もかなりくわしい。このほか、Ceppellini, V. や Gabrielli, A. の文法辞典も必備書と云えよう。また、アメリカのいわゆる新ブルームフィールド学派に属するHall, R. A. Jr. の *Descriptive Italian Grammar*, 1948, New York も面白い。さらに、生成文法をイタリア語に応用したものも近年出版されつつある。

II 辞書について

伊和辞典としては、野上素一「新伊和辞典」白水社、下位英一&坂本鉄男「イタリア語小辞典」大学書林があるが、前者は語彙が豊富で、後者は和伊辞典が付加されている点に特色がある。このほか、単語集も数種出版されている。

伊英、伊独、伊仏、伊々辞典、等については、小林英夫「辞書の味」(「イタリア図書」31・32号1964、39号1967、伊書房発行)にくわしい論述があるので、ここでは、専門的な語学研究を志す人のために、特殊辞典について触れておきたい。語源辞典ではBattisti, G. & Alessio, G. *Dizionario Etimologico Italiano*, I~V, 1965, Firenzeが、また、発音辞典ではMigliorini, B. etc.: *Dizionario d' Ortografia e di Pronunzia*, 1969, Torinoがすぐれている。イタリア各地の方言辞典も既に大型のものが1800年代後半に出版され、近年イタリアでそのリプリント版が出ている。

Ⅲ 学会とその機関誌について

現在のところ、日本ではイタリア語学だけの学会並びに専門雑誌は、残念ながら、存在しない。文学、美術、建築等の分野をも含めたものとしては、京都大学野上素一氏を会長とする「イタリア学会」があって、その機関誌「イタリア学会誌」は20号に及んでいる。また、イタリア語学以外のロマンス語学をも含む「ロマンス語学会」は、早稲田大学小林英夫委員長を中心に1969年に結成され、その機関誌「ロマンス語研究」は6号を数えている。

イタリアには、フィレンツェ大学のMigliorini, B.氏を中心に1939年に創刊され今日まで継続しているLingua Nostraというイタリア語学専門雑誌がある。このほかの雑誌については、菅田茂昭「ロマンス語学関係文献」(「ロマンス語研究」1～3号)を参照されたい。